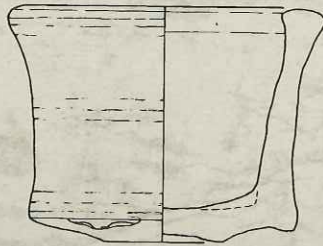


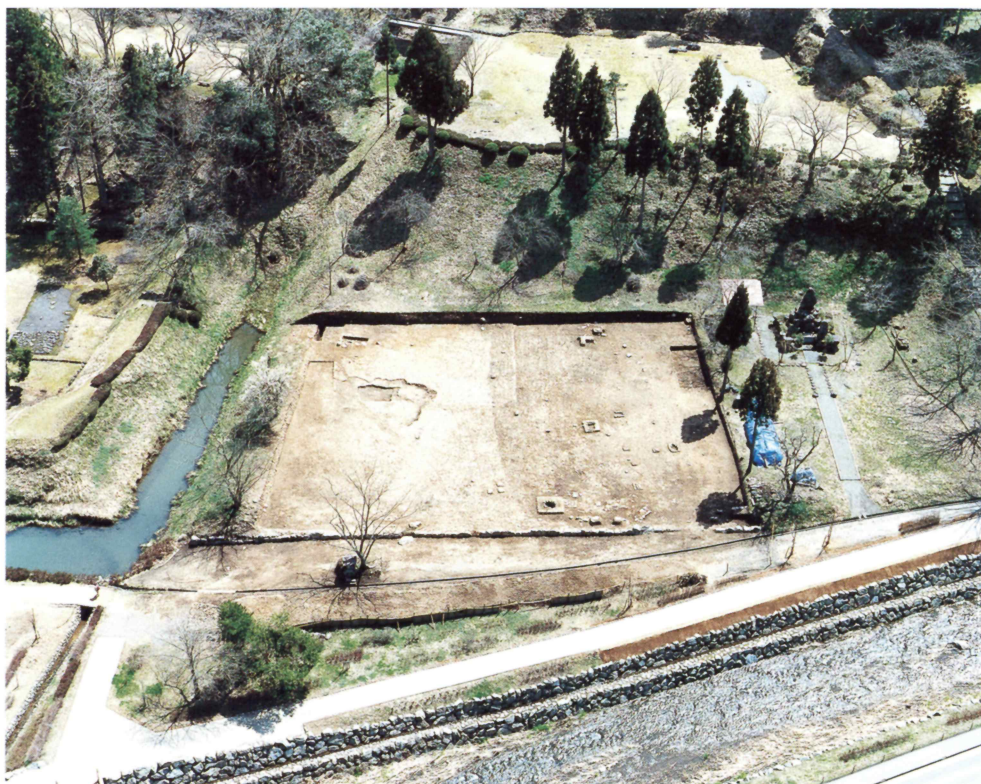
特別史跡

# 一乗谷朝倉氏遺跡 32

平成 12 年度発掘調査・環境整備事業概報



福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館



第109次調査区全景（空撮）



権殿屋敷跡整備状況（北から）

特別史跡

# 一乗谷朝倉氏遺跡 32

平成 12 年度発掘調査・環境整備事業概報

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

# 序 文

本年の主な発掘調査は、義景館堀に南接する約3,000㎡の屋敷跡（字「新御殿」）の一部を実施（第109次）し、道路に面する西側に土塁石垣跡、門跡を検出しました。この屋敷は義景館とは橋で往来でき、この屋敷跡の重要性が理解できます。

また、中山間総合整備事業の一乗谷朝倉氏遺跡内遊歩道建設に伴う発掘調査（第108次）では、下城戸から南にのびる幹線道路を195mにわたって検出することができました。近い将来、遺跡内の見学の便が良くなり観光客に喜ばれるものと確信しています。

環境整備は、築地塀跡や土塁跡を伴った中規模武家屋敷（2ヶ所）、下級武士や町人の小規模屋敷跡（9ヶ所）が検出された字「権殿」（第74・75次発掘調査分）を実施しました。周囲への住環境改善と地域住民のレクリエーション用広場としての活用にも配慮し、基本的に埋め戻して整備しました。

このように、本年も文化庁はじめ関係者のご指導やご協力を得て充実した成果を上げることができました。心からお礼を申し上げます。

平成13年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館  
館長 青木 豊 昭

# 例 言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成12年度に実施した国庫補助事業による発掘調査、および環境整備事業の概要報告書である。
2. 本年度は、「発掘調査・環境整備第2次中期10ヵ年計画」の第4年次にあたる。本書は、第109次発掘調査の成果、および第74・75次調査地権殿整備工事・館前排水路整備工の概要について収録した。
3. 本書の作成にあたっては、資料館員の検討・討議を経て、佐藤圭が編集を担当した。また、執筆については、各項目毎に分担し文末に文責を記した。

# 目 次

巻首図版

序文

例言

目次

1. 平成12年度の事業概要	3
2. 第109次発掘調査	7
遺構	7
遺物	9
3. 環境整備	14

第1図 平成12年度発掘調査・環境整備位置図

第8図 権殿屋敷跡整備説明板工図

第2図 第109次発掘調査位置図

第9図 館前排水路整備工図

第3図 第109次発掘調査遺構全測図

挿 図 遺構表示石

第4図 第109次調査出土遺物 (1)

表 1 平成12年度事業概要一覧

第5図 第109次調査出土遺物 (2)

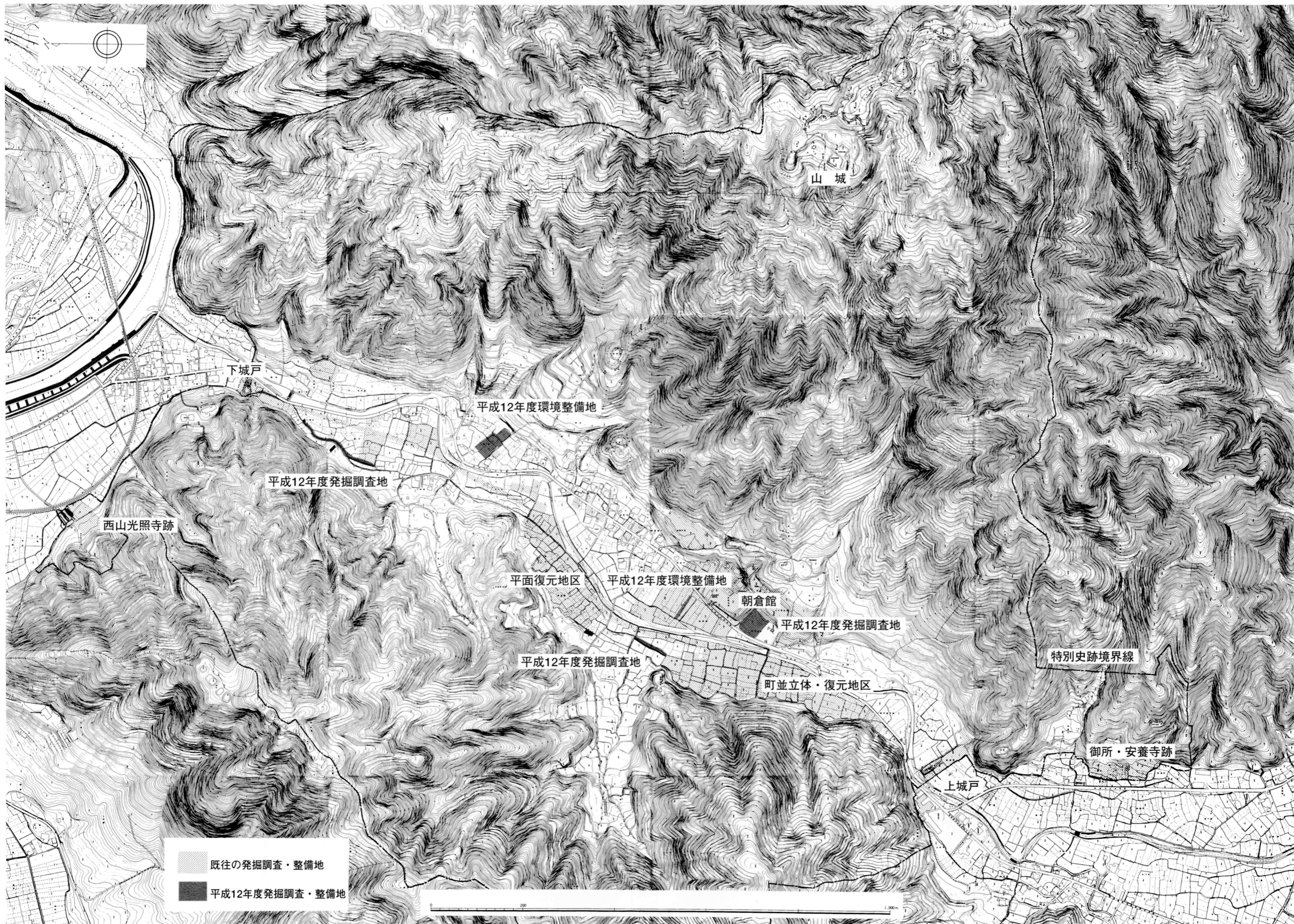
表 2 第109次調査出土遺物一覧

第6図 権殿屋敷跡整備図

表 3 植栽樹木一覧

第7図 権殿屋敷跡排水整地工図

図版 第109次発掘調査遺構	PL. 1 ~ 4
同 遺物	PL. 5 ~ 6
環境整備	PL. 7 ~ 10



第1図 平成12年度発掘調査・環境整備位置図

## 1. 平成12年度の事業概要

本年度はまず前半期に中山間地域総合整備事業に伴う調査を実施した。町並み立体復元地区から続く南北幹線道路SS260の続きを北に長さ76.0mにわたって検出した。また字吉野本では長さ20.0mのトレンチで道路遺構を検出し、字瓢町と字下城戸でも下城戸からつながる幹線道路を長さ195.0mにわたって確認した。この間に城戸ノ内町の個人住宅建設による現状変更に伴う発掘調査を行い、窆ピットや便所遺構を検出した。

また本年度の計画調査は、国庫補助事業により第109次調査を後半期に実施した。調査地は城戸の内の中央部やや南側に位置し、朝倉館の南側に濠をはさんで隣接する場所で、地字は朝倉館と同じく新御殿である。新御殿跡と伝えられる屋敷区画のうち2,000㎡を調査区に設定した。発掘調査の結果、後世の削平が大きく良好な遺構の検出には至らなかったものの、屋敷の区画を示す土塁石垣が長さ47.3mにわたって検出されるなど一定の成果をおさめた。

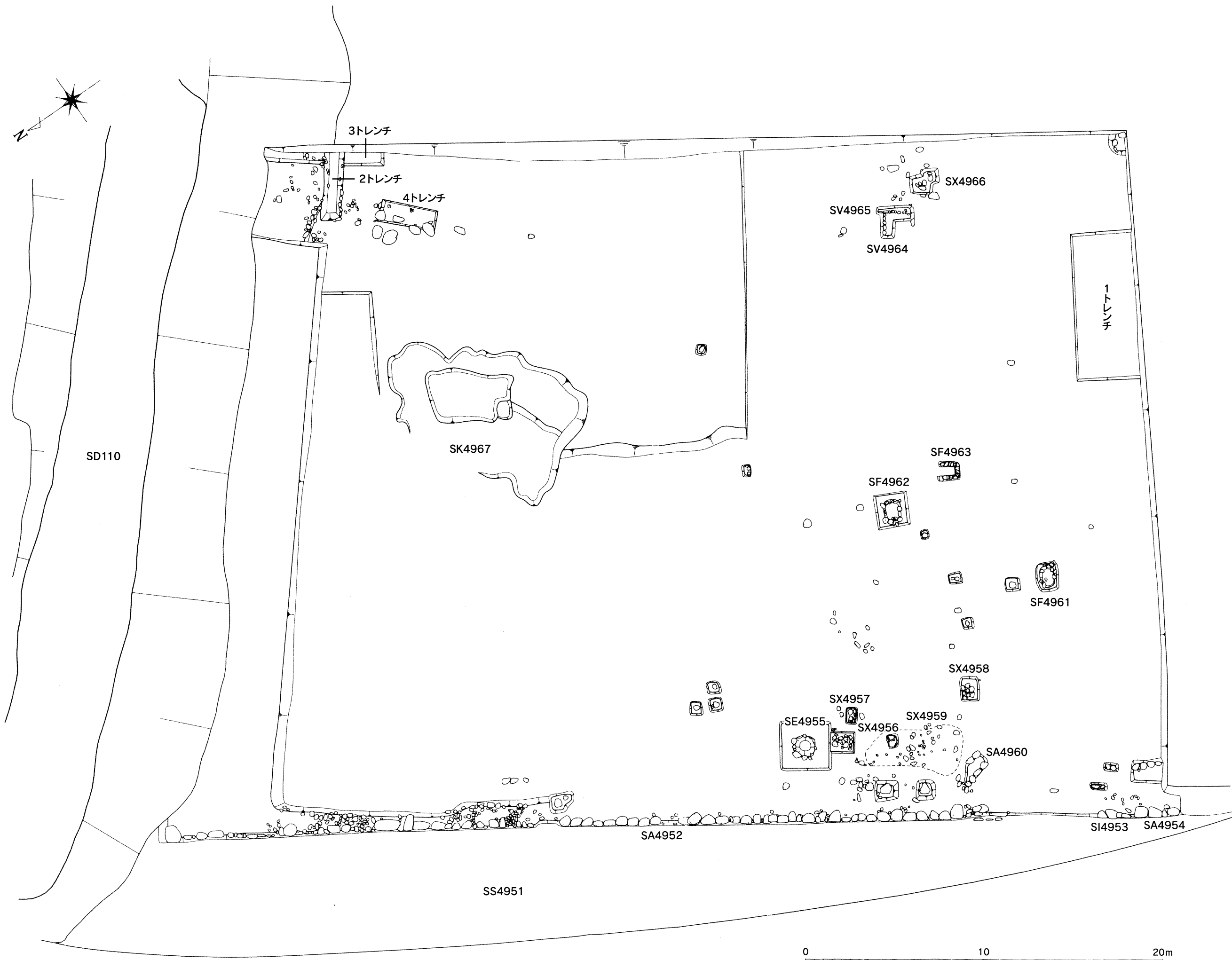
環境整備は第2次中期10か年計画に基づき第74・75次調査地（字権殿）の整備工事を行い、導入園路や説明版、表示石を設置し、植栽を施した。またこれとは別に、朝倉館前の排水路の整備工事を実施し、芝生広場の排水の便をはかった。

調査回数	調査箇所	調査期間	面積	調査理由
107次	城戸ノ内町字瓜割流	4月10日～5月2日	98㎡	住宅建設による現状変更
108次	城戸ノ内町字木蔵 吉野本・瓢町・下城戸	4月1日～8月11日	1,400㎡	中山間地域総合整備事業に伴う調査
109次	城戸ノ内町字新御殿	4月1日～12月20日	2,000㎡	計画調査
環境整備箇所	期間	整備事業内容		
城戸ノ内町字権殿	9月15日～11月15日	武家屋敷・門・土塁・道路跡等の整地 舗装・造成、説明板設置、植栽等		
城戸ノ内町字上河原	10月25日～11月15日	館前排水路整備工、石橋設置等		

表 1 平成12年度事業概要一覧







第3図 第109次発掘調査遺構全測図

## 2. 第109次発掘調査

本発掘調査区は、狭義の朝倉氏遺跡を区画する土塁である上城戸から北へ約400m、下城戸から南へ約1,200mを測る地点に位置しており、福井市城戸ノ内町字新御殿に所在する。周辺には北に朝倉氏遺跡の中心である義景館跡、東に湯殿跡や中ノ御殿跡、南には中ノ御殿跡や諏訪館跡などの重要施設が集中する地区である。

今回の発掘調査により設定された調査区は、面積2,000㎡を測るが、本来の屋敷区画としては約3,000㎡を測るものと考えられる。しかし、区画内南側に戦没者忠魂碑が存在していることから、これを調査対象地区から除外したため、区画内全体の様相を把握するには至らなかった。また、本調査区内は昭和30年代後半におこなわれた畑地の整備に伴い大きく削平を受けていたことから、上層の遺構については遺存状態が極めて悪く、部分的に検出されたにすぎなかった。以下に主な遺構について概略を報告する。

### 遺構（第2、3図、P.L. 1～4）

調査開始以前より、屋敷の内外を区画すると想定される石列の一部が露出していたことから、この石列の検出により、屋敷の区画を把握することを最初の確認事項として調査を開始した。その結果、検出された石列は構築の状態および、検出状況から後世の石列であることが確認されたため、石列の除去を進めるとともに掘削を進め、本来の屋敷区画土塁の石列であるSA4952の検出をおこなった。SA4952検出後は屋敷内の遺構検出をおこなったが、先に述べたように、後世の削平が進んでいたことから良好な遺構の検出には恵まれなかった。また、北側に隣接する義景館から橋により接続する門の検出もあわせて重点的におこなったが確認することはできなかった。

**SS4951** 屋敷の西側外に位置する南北道路であり、一部のみの検出であったことから、幅員は不明である。全面砂利敷であり、道路西側に流路を持っていたと想定される旧一乗谷川に平行する道路であったと想定される。 **南北道路**

**SA4952** 屋敷を区画する土塁石垣であり、残存長47.3m、幅2.0mを測る。北端では義景館の南濠であるSD110に接続し、西側では道路SS4951に面している。また、検出された石組は大部分が1段のみの検出に留まったが、小型の石組の部分については2段を検出することができた。本土塁の北方延長上が、義景館西濠の南北中軸線上に位置することから両者が密接な関係を持って造営されたものと考えられる。 **区画土塁石垣**

**SI4953** SS4951に面する門であり、北には土塁石垣SA4952が、南には土塁石垣SA4953が接続する。遺存状態が不良であったため、全形は知られないが残存長は1.1mを測る。

**SA4954** 屋敷の区画を示す土塁石垣であり、門SI4953を挟んでSA4952と対をなす。3.5mを検出したものの、大部分が調査区域外に延びているため総延長は不明である。

**SE4955** 調査区西側、SA4952に近接する位置において検出された井戸であり、レベル的に見

て上層遺構のものと考えられる。本遺跡において通常検出される井戸と同じく、川原石を積み上げるタイプであり、宇野隆夫氏によるC1類石組円筒形井戸である。<sup>1)</sup>

**SX4956** SE4955南側において検出された石敷遺構であり、SE4955とはレベル差が少ないことから、同時期の遺構である可能性が高いものと考えられる。

**SX4957** SX4956の東側において検出された石敷遺構であり、本来は先に述べたSX4956と同一の遺構であった可能性が高い。

**SX4958** SX4957の南において検出された石敷遺構であるが、SX4956・4957が石を平坦に敷いているのに対し、本遺構の石は凸凹が目立つなど相違点が認められる。

**SX4959** SX4956・4957の南側において検出された石敷遺構であるが、これらとのレベル差が0.1m前後を測るため下層遺構のものと考えられる。また、SX4956・4957が人頭大の川原石で構成されているのに対し、本遺構は砂利敷きを主体としており、良く踏み固められた様相を呈していた。

**SA4960** SX4959南側で検出された土塁石垣である。大部分が破損しており、延長1.8mのみ検出が検出され、幅1.1mを測る。下層遺構の土塁と考えられるが、先に述べたSA4952より主軸を45度東へ大きく振っている。SI4953との位置的關係等からも上層遺構との関係が想定しにくく、性格等については不明である。

**SF4961** 長軸1.3m、短軸0.9mを測る上層の石積遺構である。遺存状態は悪く部分的に側壁を1石残すのみであった。

**SF4962** 長軸1.2m、短軸1.1mを測る上層の石積遺構であり、主軸はSF4961と同じく東西方向である。側壁は1石を残すのみであった。

**SF4963** 長軸残存長1.2m、短軸0.9mを測る上層の石積遺構であり、主軸は南北方向である。

**SV4964** 調査区東端において検出された石列であり、延長1.2mのみを検出した。

**SV4965** SV4964の東側で検出された石列であり、SV4964とはT字状に接続する。延長1.6mのみ検出された。

**SX4966** SV4965の東で検出された人頭大の礫で構成された石敷遺構であるが、遺存状態が不良であったため、詳細については不明である。レベル的に上層遺構に属するものと考えられる。

#### カワラケ廃棄土壌

**SK4967** 調査区内北側において検出された、不整形を呈する廃棄土壌である。長軸11.0mを測り、短軸については西側が削平のため不明であるが約7.0mを測るものと考えられる。深さは深いところで約0.6mを測る。本土壌内からは炭化物とともに多量のカワラケおよび、少量の陶磁器が廃棄された状態で検出されており、火事場整理に伴う遺構と想定することも可能である。

以上、検出された遺構の概要について述べてきたのであるが、この他にも最初に述べたように、北側に位置する義景館から接続する門の存在が想定される位置に第2～4トレンチを設定し重点的に検出をおこなったのであるが、第4トレンチ内において検出された土塁石垣の残骸に見られるように、上層において改変が大きく明確な遺構を検出するには至らなかった。

(水村伸行)

1) 宇野隆夫「井戸考」『史林』第65巻5号 史学研究会 1982年

## 遺物（第4、5図、PL.5、6）

第109次調査で出土した遺物の総数は16,297点である。その内訳は表2のように、越前焼545（3.3%）、鉄釉63（0.4%）、灰釉30（0.2%）、土師質土器15,139（92.8%）、輸入陶磁器252（1.5%）、金属製品26（0.2%）、石製品30（0.2%）となっている。調査面積は2,000m<sup>2</sup>であり、1m<sup>2</sup>あたりの遺物密度は8.14/m<sup>2</sup>点となる。

各器種の内訳に示すように、大半を土師質土器が占めており、これらはカワラケ廃棄土壌 SK4967から集中して出土したものである。遺構面全体が削平されていたこともあり、本遺構以外からは、ほとんど遺物が出土しなかった。また、本遺構からは、図示していないが、サザエなどの貝殻や炭片が出土した。

カワラケ廃  
棄土壌

器種	点数	%		
越前焼	甕	298		
	壺	62		
	鉢	45		
	播鉢	140		
	計	545	3.3	
	鉄釉	碗	55	
		皿	2	
		鉢	4	
		茶入	1	
	計	63	0.4	
灰釉	皿	11		
	卸皿	1		
	碗	5		
	鉢	6		
	香炉	2		
	瓶	1		
	壺	2		
	合子	1		
	その他	1		
	計	30	0.2	
土師質土器	皿	15,127		
	土釜	7		
	耳皿	2		
	土錘	1		
	吹子	1		
	その他	1		
	計	15,139	92.8	
	瓦質	皿	1	
		風炉	2	
		その他	2	
計	5	0.1		
国産陶器・その他	13	0.1		
近世・その他	183	1.1		
小計	15,978	98.0		

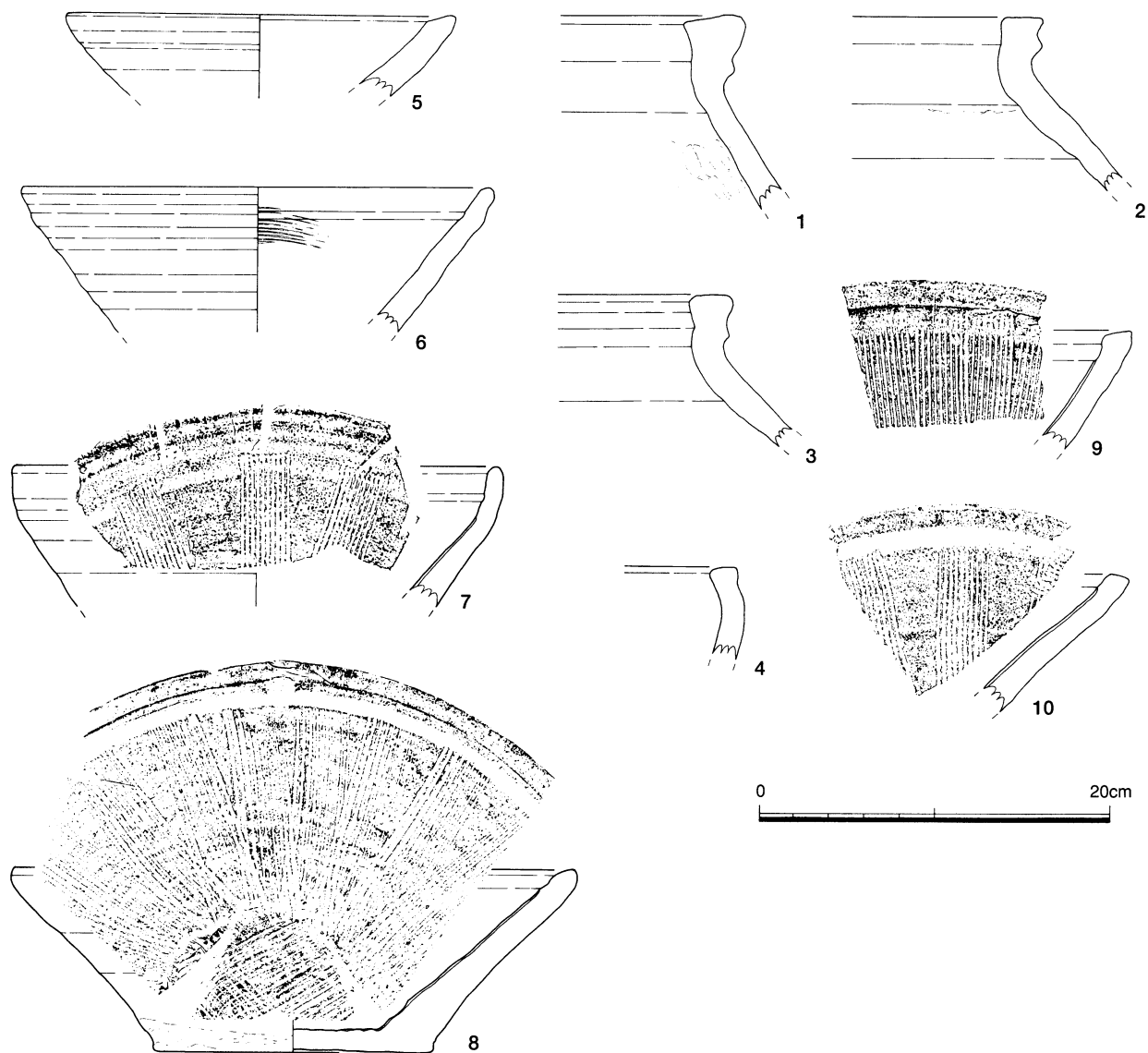
  

器種	点数	%	
青磁	碗	40	
	皿	26	
	鉢	8	
	香炉	4	
	盤	6	
	その他	2	
	計	86	0.5
白磁	皿	97	
	碗	1	
	坏	1	
	計	99	0.6
磁器	皿	36	
	碗	25	
	坏	3	
	計	64	0.4
朝鮮製陶磁器腕小	3		
小計	252	1.5	

器種	点数	%	
金属製品	釘	8	
	銅銭	11	
	碗	2	
	銅製仏具	1	
	その他	4	
計	26	0.2	
石製品	バンドコ	5	
	盤	3	
	硯	2	
	白	1	
	砥石	3	
	鉢	1	
	不明	15	
計	30	0.2	
その他	炭	4	
	貝殻	6	
	不明	1	
計	11	0.1	
小計	67	0.5	
合計	16,297	100	

表2 第109次調査出土遺物一覧



第4図 第109次調査出土遺物(1)

越前焼

本調査区からは、他の調査区と比較しても、土師質土器以外の出土が極端に少なかった。越前焼についても、大甕の埋設遺構などが検出されなかったこともあり、割合が3.3%と低く、また、小破片が多かった。そのため、底部から口縁まで残存するものは、(8)の播鉢ぐらいで、まとまって接合できる遺物も少なかった<sup>1)</sup>

(1)は口縁が肥大したIV群cの大甕。(2)・(3)は、口縁が(1)のように完全には肥大化

1) 越前焼大甕・播鉢の分類は、『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983参照

していないIV群 a の大甕。(4) は口縁が内湾する鉢。(5) は口径22.0cmを測る鉢。胎土は橙褐色で焼成良好。(6) の鉢は口径26.6cmを測り、口縁部内面の一部に弧状の櫛目模様を施す。胎土は灰色で焼き締まっている。(7) の播鉢は口縁部が内湾するタイプのもの。口径27.6cmを測る。10条1組の播目は丁寧に深く入れられ、胎土は黄褐色で焼成良好。(8) はSK4967から出土した播鉢で、口径31.8cm、器高10.5cmを測る。口縁が内傾するIV群で、9条1組の播目を有する。(9) もIV群で、播目が密に引かれる。(10) は皿群bの播鉢。

#### 土師質土器

遺物全体の中で土師質土器の割合は92.8%と高い割合を占める。15,139点の内、15,127点は皿である<sup>2)</sup>。その他の遺物としては、土釜・耳皿・土鍾・吹子などがあった。これらの大半はSK4967から出土した。皿についてみると、タール痕のあるものが341点で、2.3%しかないことから、灯明皿として使用されたものは少なく、ほとんどが酒盃や盛皿として使用され廃棄されたものと考えられる。そのため種類はC・D類が多かった。またB類など小型のものには完形で出土したものがあつた。カワラケの使用割合については、第35次調査で下城戸外濠トレンチ出土の遺物でも割合を出している。この時はタール痕を有する割合は58%であつたので、それと比較してもSK4967出土の土師質皿の灯明皿としての使用割合が低いことが分かる<sup>3)</sup>。

灯明皿使用  
割合

(11) は口縁を真っ直ぐ立ち上げてナデ調整するG類皿で、口径5.2cm、器高1.5cmを測る。(12) は底部中央を指で押し上げたA類皿。口径6.9cm、器高1.2cmを測る。(13)・(14) はB類皿。(15) は口径8.2cm、器高2.4cmを測るB類皿。(16) はタール痕のないC類皿。(17) は口径8.8cm、器高2.2cmを測るC類皿で、口縁全体にタール痕有り。(18)～(20) は口径11cm以下で、タール痕のあるD類皿。(21)～(25) は同じD類皿でも、口径は12cm以上15cm以下で、タール痕はない。(25) は口径14.1cm、器高2.1cmを測る。(26)・(27) は耳皿で、G類皿の口縁を内側に折り曲げて成形している。(28) は口径12.4cmを測る羽釜。

#### 瀬戸・美濃焼

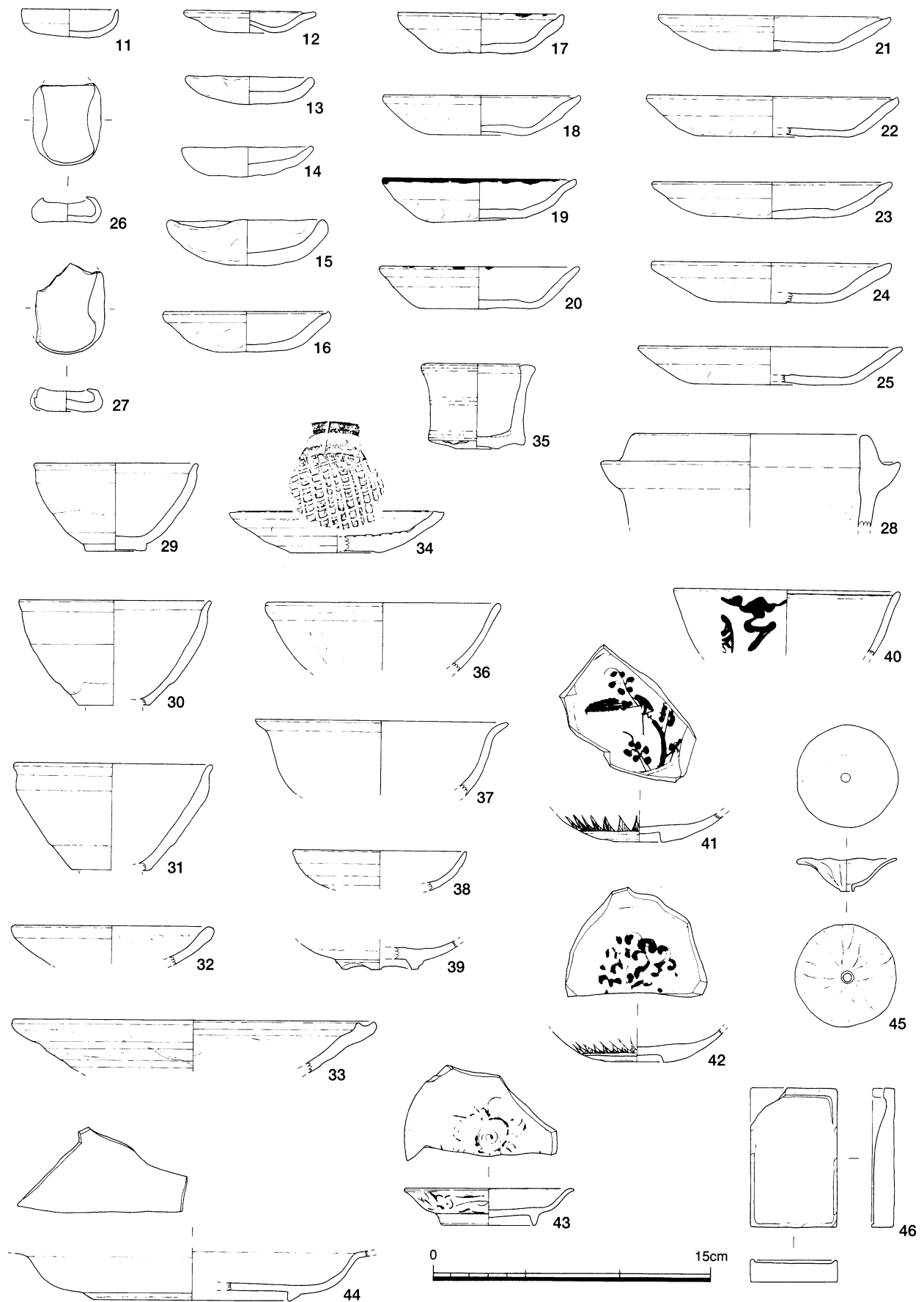
割合としては0.6%と非常に少ない。鉄釉碗の他、聞香に使用されたと考えられる小型の灰釉香炉や灰釉の卸皿などが出土した。

(29) は口径8.8cm、器高4.8cmを測る小型の鉄釉碗。(30) の鉄釉碗は口径10.2cmを測る。(31) の鉄釉碗は、胎土がやや赤みを帯びる黄白色で、鉄釉は鉛色に発色する。露胎部はシブ鉄を施す。(32) は口径10.5cmの灰釉皿で、口縁部のみ灰釉がかかり、以下は露胎。外面露胎部は火を受けて煤が付着し、釉薬も変色している。(33) は口径19.5cmを測る灰釉鉢で、口縁には沈線が作られ、灰釉は口縁から胴部にかかり、下半は露胎となっている。(34) は口径11.5cm、器高2.3cmを測る灰釉の卸皿。口縁は沈線があり、灰釉がかかる。(35) はやはりSK4967から出土した灰釉の香炉で、口径5.4cm、器高4.6cmを測る。口縁部はわずかに外反し、外面は口縁と胴部中央と下部に沈線がめぐり、削って低い高台が作られ、腰部には小さな足が3足貼り付けられる。

灰釉香炉

2) 土師質皿の分類は『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』I 1979参照

3) 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡』XI 1980参照



第5図 第109次調査出土遺物(2)

## 中国製陶磁器

割合は1.5%で、破片は小破片が多く、接合するものも少なかった。器種としては、青磁碗や白磁皿・染付碗・染付皿・朝鮮製陶磁器碗などが出土した<sup>4)</sup>

(36)は外面に線描蓮弁文を有する青磁碗。(37)は口縁部が外反する青磁碗で、口径13.5cmを測る。内外面とも無文で、胎土は灰色を呈し青灰色の釉がかかる。(47)・(48)は外面に鎬蓮弁文の施された青磁碗である。(49)は外面の口縁部下に鋌を模した突起が作られる青磁盤である。(38)は口径9.2cmを測る白磁皿。口縁は内湾し、外面はヘラ削りされている。(39)の白磁皿は、高台が切り高台で露胎になっている。高台内に黒漆で銘が書かれるが一部のみのため判読はできない。(40)は口径12.0cmを測る染付碗。(41)は見込みに捻花、外面に芭蕉葉文の描かれる碁笥底の染付皿。(42)も同じく見込みに花文の描かれるC群の染付皿。(43)は端反のB群染付皿。口径9.9cm、器高2.0cmを測る。見込みには十字花文、外面には牡丹唐草文が描かれる。黒漆による補修痕あり。(44)は口径20cmを超えるF群の染付皿で、見込み、外面の文様は発色が良くないため不明。黒漆による補修痕あり。

## 金属製品

釘・銅銭・仏具などが出土した。

(45)は仏像の持物の一部と思われる銅製部品。直径5.5cmの円錐形で、中央に孔があく。仏具外面には線刻が施され、縁はわずかに波打ち、蓮葉の形を模している。表面に緑青がでているが保存状態は良い。

## 石製品

バンドコ・盤・硯・臼・砥石などが30点出土したが、小破片で図示できるものが少なかった。

(46)は長さ7.5cm、幅4.7cm、厚さ1.2cmの長方硯。陸部中央に、使用痕が認められる。

(宮永一美)

---

4) 染付の分類は「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』NO.2 1982参照



### 3. 環境整備

本年度は一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査・環境整備事業の「中期第2次10ヵ年計画」に基づき、平成3年度の第74・75次発掘調査地（権殿地係）2,600㎡について平成12年9月15日～11月15日にかけて整備工事を実施した。なお写真撮影は同年11月16日に行った。

江戸時代末期に描かれた一乗谷の古絵図には、権殿地係に「朝倉権ノ頭跡」の記載があり、同屋敷の発掘解明と整備公開が望まれていた。整備に当たっては、この地区は城戸ノ内町の民家に囲まれたところにあるので、周囲の住環境改善と地域住民のレクリエーション用広場としての活用にも配慮した。

次に義景館前の上川原地係で、館前排水路整備工事を、平成12年10月25日～11月15日にかけて実施した。館の外濠の排水が容易に行われるよう、既存の水路の流水横断面を大きくすることにした。整備にあたっては、史跡景観の保全に十分配慮した。

#### 第74・75次調査地権殿整備工事（第6～8図、PL.7～10）

第74・75次発掘調査では、築地塀跡や土塁跡を伴った中規模の武家屋敷跡が2屋敷と下級武士や町人の小規模屋敷跡が9屋敷ほど検出された。屋敷の区画ができるだけ分かるような整備につとめたが、小規模屋敷は屋敷の境界の溝や石列が不明のものがあつたり、屋敷が発掘調査地外に広がっているなど、屋敷の全範囲が確認されているものはほとんどない。屋敷の規模を表示できたのは、中規模の武家屋敷だけである。

後世に洪水を受けて流失した遺構も多く、全体に遺存状況はよくない。建物跡は礎石を用いたものばかりで掘立柱建物跡はみつからないが、13棟ほど検出されている。残存状況が良くなく、規模の不明なものが多い。井戸は9基、石積施設は8基、大甕ピット群は1ヶ所遺存している。また溝や、屋敷に出入りするための通路、幹線になると推定される道路跡の一部も発掘されている。

遺構は直接展観するほど全体的に遺存状況はよいとはいえず、また残存する遺構面の大部分も低位置にあり浸水など保存上問題があるので、一部の遺構を除いては露出展観しないで、基本的には埋め戻して整備することにした。

整備地区は発掘調査後10年近くを経過し、全面に丈の高い雑草が生い茂っており、これらを機械や人力で伐採、除去した。また一部の井戸や溝を除いて、全体が南側は厚く北側は薄く、5～80cmの厚さで発掘排土により埋め戻されていた。

#### 武家屋敷跡

東側の武家屋敷は、南側の発掘排土盛土を削平し、北側に10～40cmの厚さで埋め戻し整地、その上に10cm厚で粘質土の山土舗装を行った。遺構面と類似した感じになるよう、上層に砂利を敷いて120kgプレートで展圧した。下層の排水を考慮して、南北方向に横断する径10cmの網状暗渠排水管（TACネット）を3条伏設し、北側の東西溝に排水するようにした。暗渠排水管の周囲は碎石でまいて、上面には5cm厚で径3cm内外の砂利を敷いた。掘削に当たっては、

遺構を破壊しないよう留意した。

西側の武家屋敷跡は、南側の発掘排土盛土を削平し、北側に10～40cmの厚さで埋め戻し整地、その上に砂質土による10cm厚の山土舗装を行った。軽度の運動に支障がないよう砂利は下層に混合し、表面は山砂で被覆されるよう120kgプレートで展圧舗装した。また東西方向に横断し東側の道路側溝に排水する暗渠排水管を、3条下層に埋設した。

築地塀跡や土塁跡は、側石を補修また道路側の側石がないところは1石分を補充、上部に盛土整形し、上面に高麗芝を植栽した。

築地塀跡

武家屋敷の間の通路跡（幅1.8m）は10cmほど埋め戻し、その上に10cm厚の礫混じりソイルセメント舗装を行った。礫混じりソイルセメント舗装は、良質の山砂0.15m<sup>3</sup>とセメント40kgに少量の水を加え混合し、敷ならしの過程で砂利0.15m<sup>3</sup>を混入し、砂利が表面近くに位置するよう展圧施工したものである。なお西側の溝の東側石は、すべて補充した石である。

溝側石や石垣、境界石の補充石には、発掘調査で出土した野面石を用いた。

武家屋敷南側の東西幹線と推定される道路の一部の土塁際も、遺構面を埋め戻し遺構面に類似した礫混じりソイルセメント舗装（10cm厚）とした。道路跡の西側が低く雨水が滞水するため、西南部の溝と西北部の外の溝を結ぶ暗渠排水管を埋設し、北側に排水するようにした。

道路跡

西側、北側の小規模屋敷地区は、低いところは盛土整地し、全面に山砂を一層敷いて高麗芝を植栽することにした。北側の小規模屋敷の間の通路は埋め戻し、屋敷前面の境界石や通路南側の側溝を、遺構の真上に復原設置した。

小規模屋敷跡

整備地区の西北側に、見学者導入のための園路（幅1.8m、延長25m）を造成した。遺構の道路跡と区別するため、縁石は設けず、またソイルセメント舗装とした。ソイルセメント舗装は、良質の山砂0.3m<sup>3</sup>当たりセメントを40kgの割合で配合、適量の水を加えて練り合わせたものである。園路の基盤として、碎石を5cm厚に敷いて展圧した。

園路に続いて整備地の西北側に説明板を設置し、遺構と整備の概要を記した。埋め戻されて見ることができない礎石や井戸、石積施設、大甕ピットなどは説明図に明示されている。説明板の大きさは121×77cmで、アルミ板にシルクスクリーン印刷したものである。設置台には、笏谷石に質感が類似した別畑石を用いた。大きさは152×100cm、高さ60cmの平置型である。

説明板

門跡や土塁跡、道路跡などを表示するため、ミカゲ石（35×30×20cm）の遺構表示石を5個設置した。天端を本磨きし、文字を陰刻した。

遺構の排水路と発掘調査地外の排水路



を結ぶ、仮設の排水路を造成した。遺構の溝と誤解しないように、また史跡景観に配慮して側壁にはミカゲ石風化粧ブロック（42×28×32cm）を用い、突き付けの1段積みとした。溝の内幅30cm、深さ25cmとし、溝底はソイルセメント舗装とした。

#### 高木植栽

高木植栽は、四季の観賞を考慮し、また戦国時代に好まれた樹種や当時一乗谷に生育していたと推定される

樹木の中から選んで実施した。アカマツ2本、シダレザクラ、ウメ、イロハモミジ、ケヤキ各1本である。植栽に当たっては、建物跡、井戸跡、石積施設などの遺構が存在するところや施設間の歩行ルートを除いて、往時の一般的に植栽される塀際や屋敷の隅などに配植した。

樹種	樹高	胸高幹周	枝張
アカマツ	4.5m	0.35m	2.0m
	4.3	0.31	2.0
シダレザクラ	3.5	0.25	
ウメ	3.6	0.25	2.0
イロハモミジ	3.8	0.22	1.8
ケヤキ	4.5	0.17	1.2

### 館前排水路整備工（第9図、PL.10）

#### 溝の規模

義景館前の芝生広場の中ほどを縦断する東西方向の排水路（幅40cm、深さ20～25cm、延長54m）があったが、不時の大雨の出水などには排水機能が十分でなく、排水が容易に行われるよう溝の流水断面を大きくする必要があった。この溝は芝生広場を横切っており、溝に転落した場合の安全度や容易に踏み越えられるほどの幅を考慮して、溝の上端の幅は50cm、深さも50cmとした。

溝側石には史跡景観に配慮して、発掘調査で出土した自然石を使い野面空積みとした。崩落しないように裏込めにモルタルを用いて固定したが、上面には掘削土を埋め戻して被覆しモルタルが見えないようにした。

流出口のU字型暗渠は据えなおし、周囲は裏込めに礫を入れた自然石の野面積みとした。なお流水の落下部には自然石を敷いて、基盤の土砂が流失しないよう考慮した。

#### 石橋

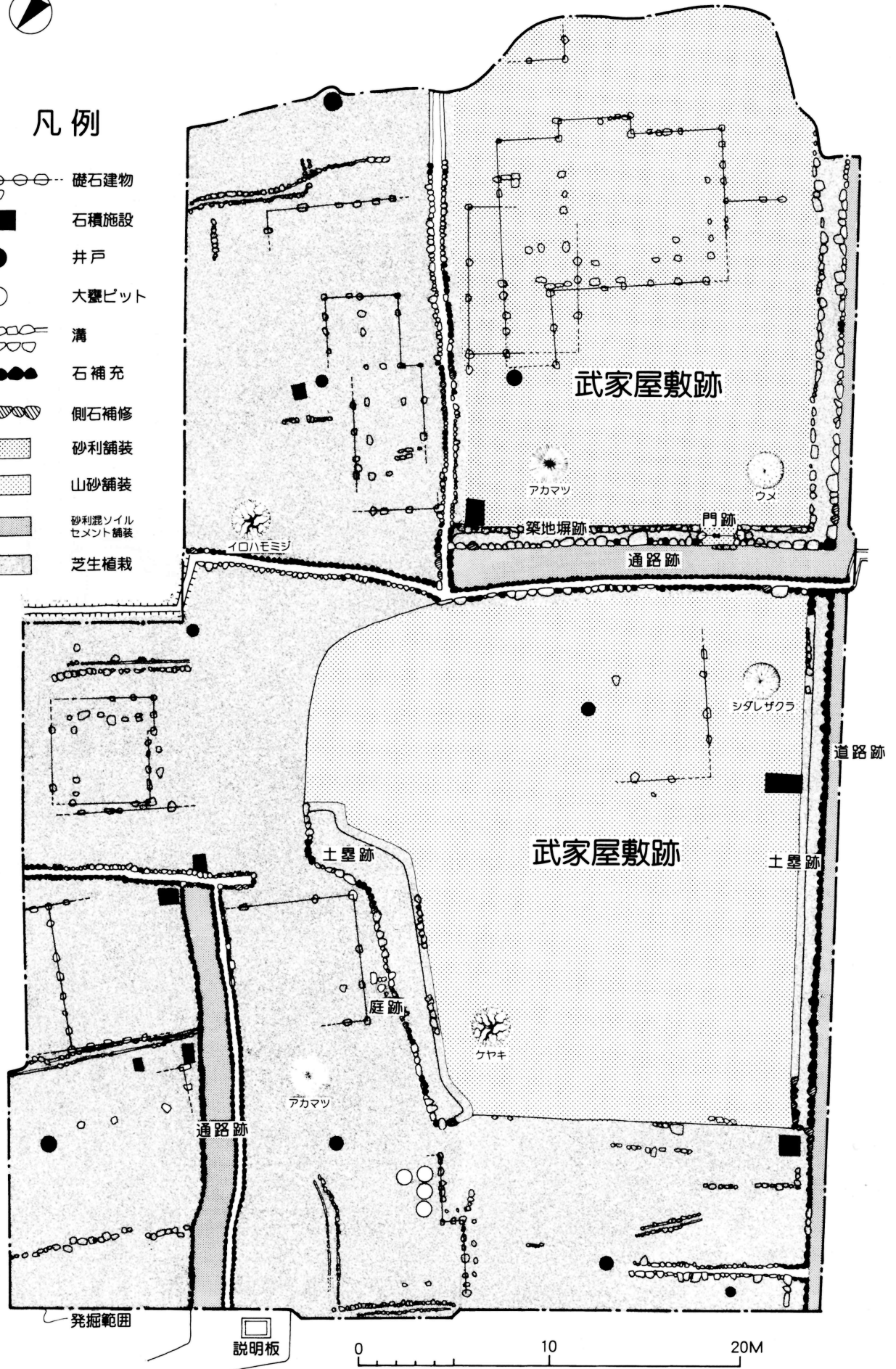
排水路の中ほどに車椅子でも通れるように、別畑石の切石（90×60cm、厚さ20cm）2枚を突き付けた石橋を架した。1枚の大きさは、第25次発掘調査で出土した道路横断溝に架かる石橋の笏谷石に近く、色や質感も似ている。滑らないよう、石の上面はビシャン打ちの粗面仕上げとした。

（藤原武二）

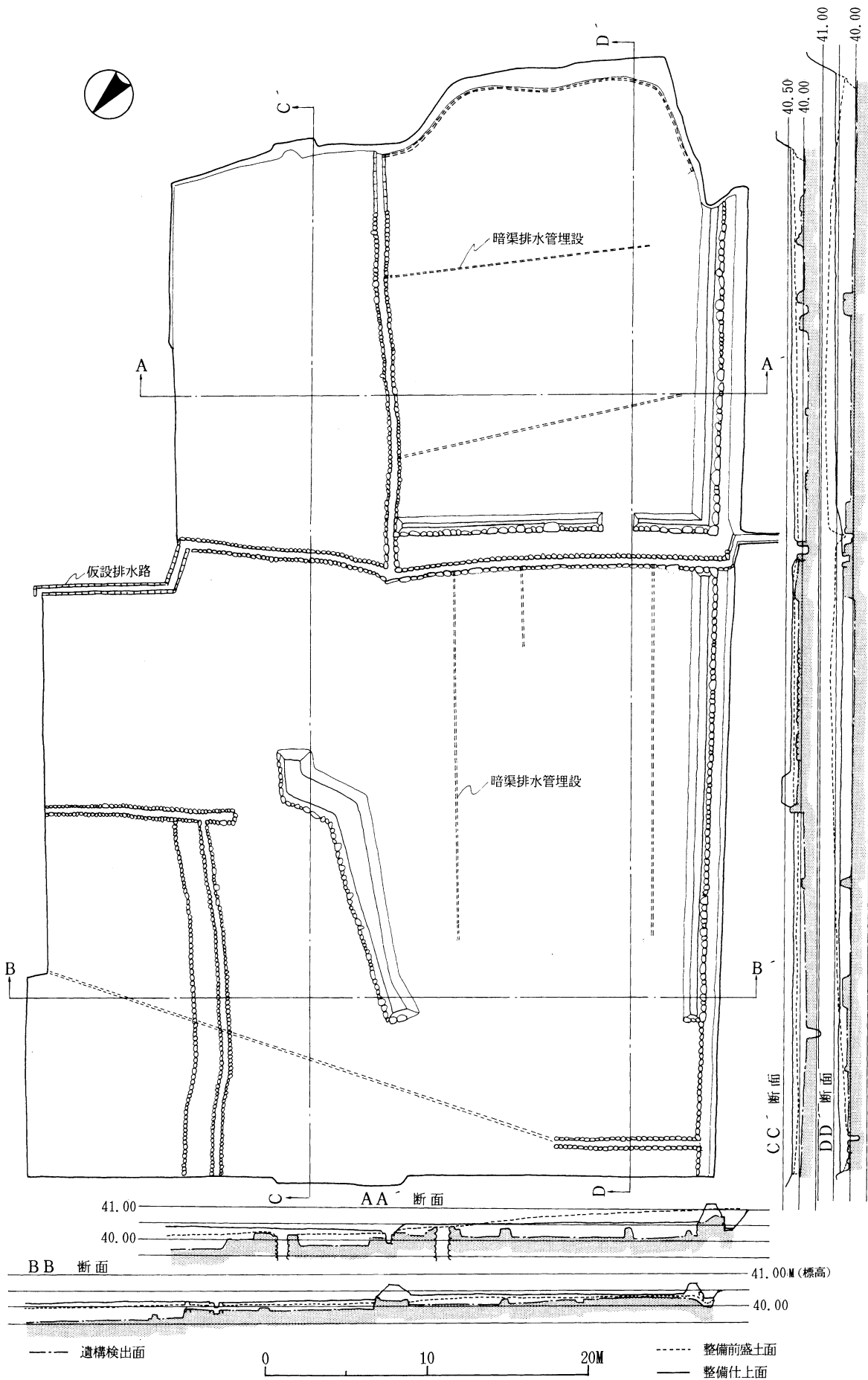


# 凡例

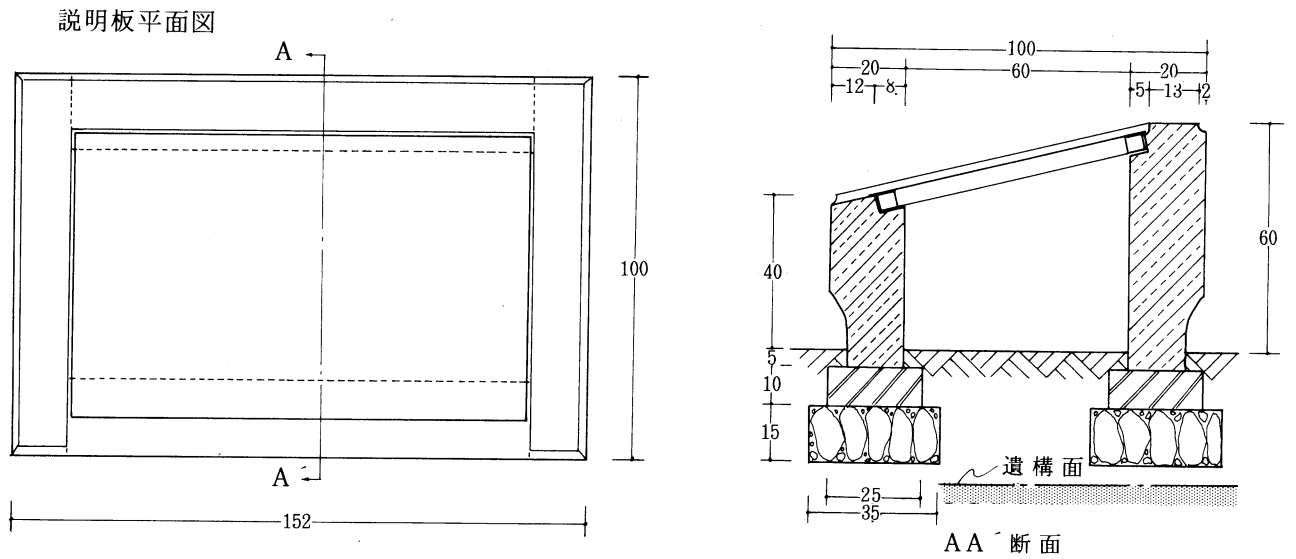
-  礎石建物
-  石積施設
-  井戸
-  大罫ピット
-  溝
-  石補充
-  側石補修
-  砂利舗装
-  山砂舗装
-  砂利混ソイルセメント舗装
-  芝生植栽



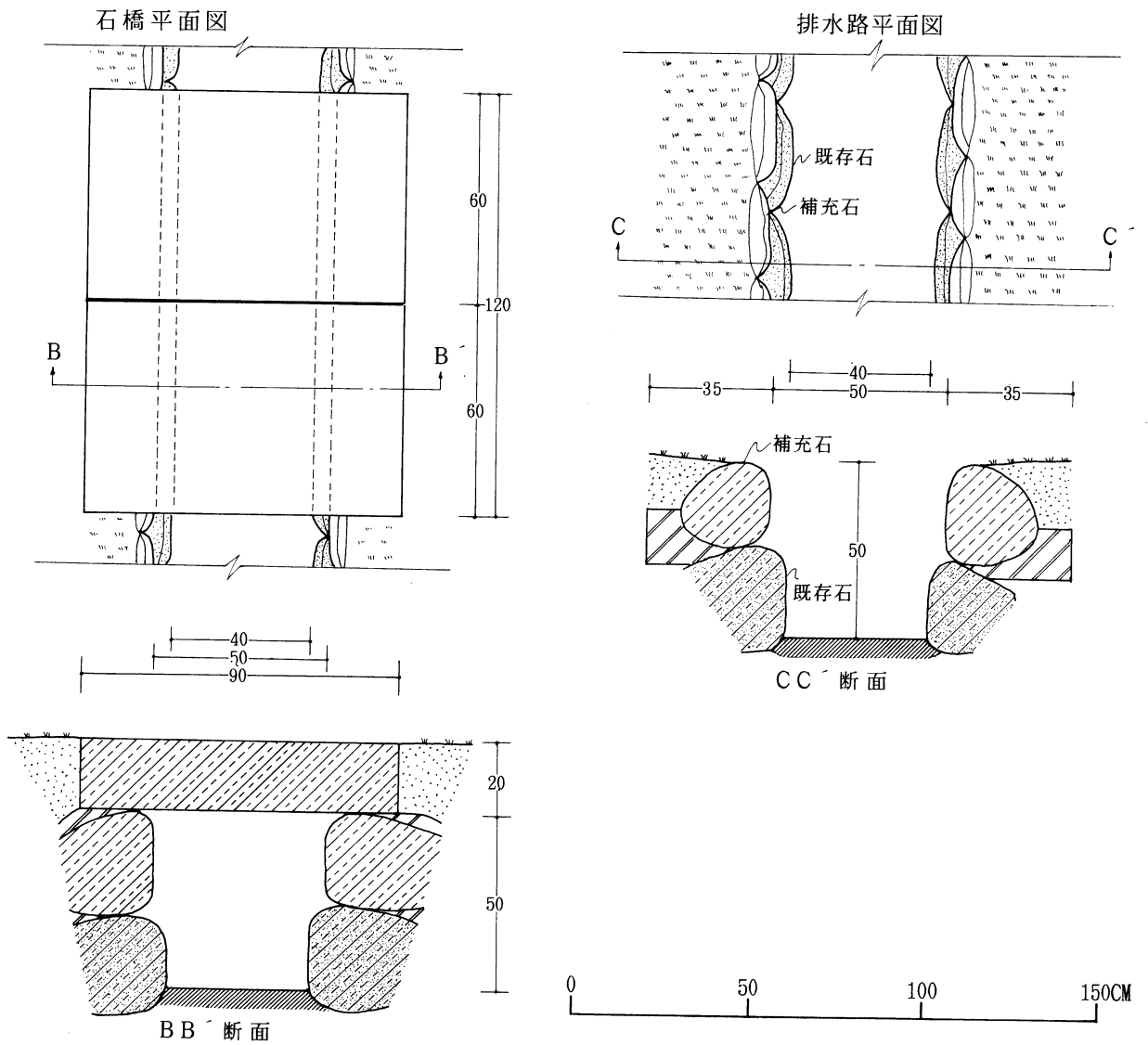
第6図 権殿屋敷跡整備図



第7図 権殿屋敷跡排水整地工図



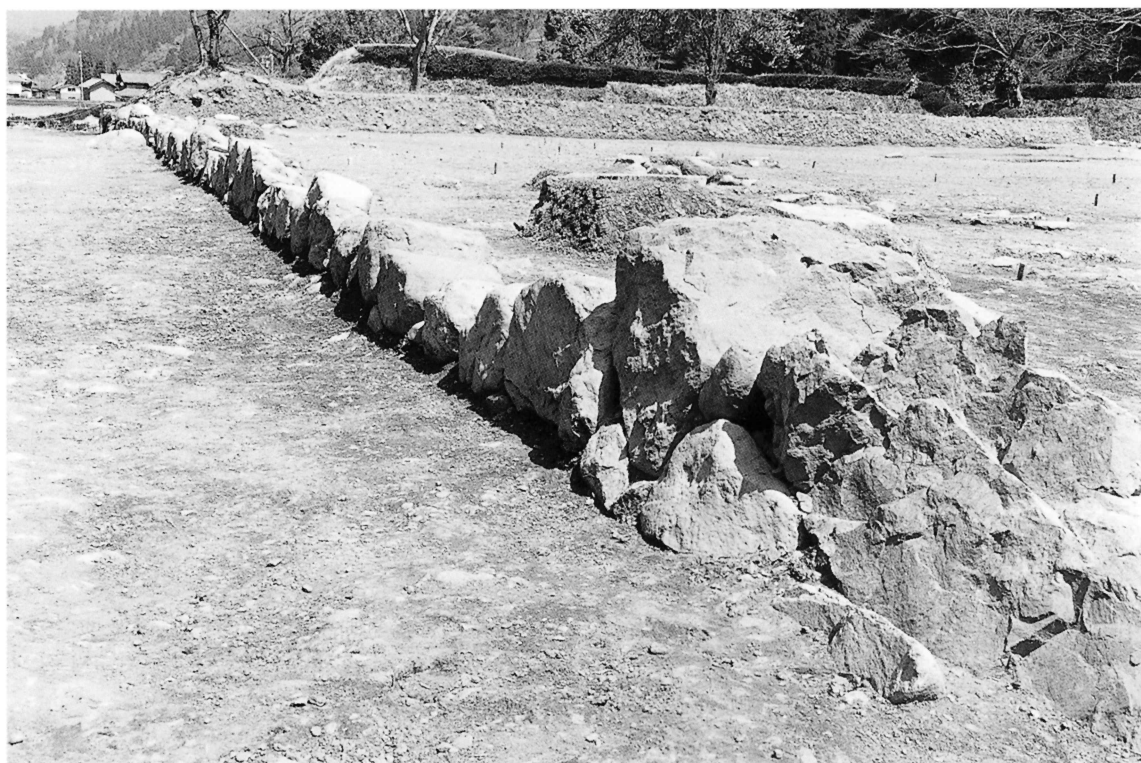
第8図 榿殿屋敷跡整備説明板工図



第9図 館前排水路整備工図



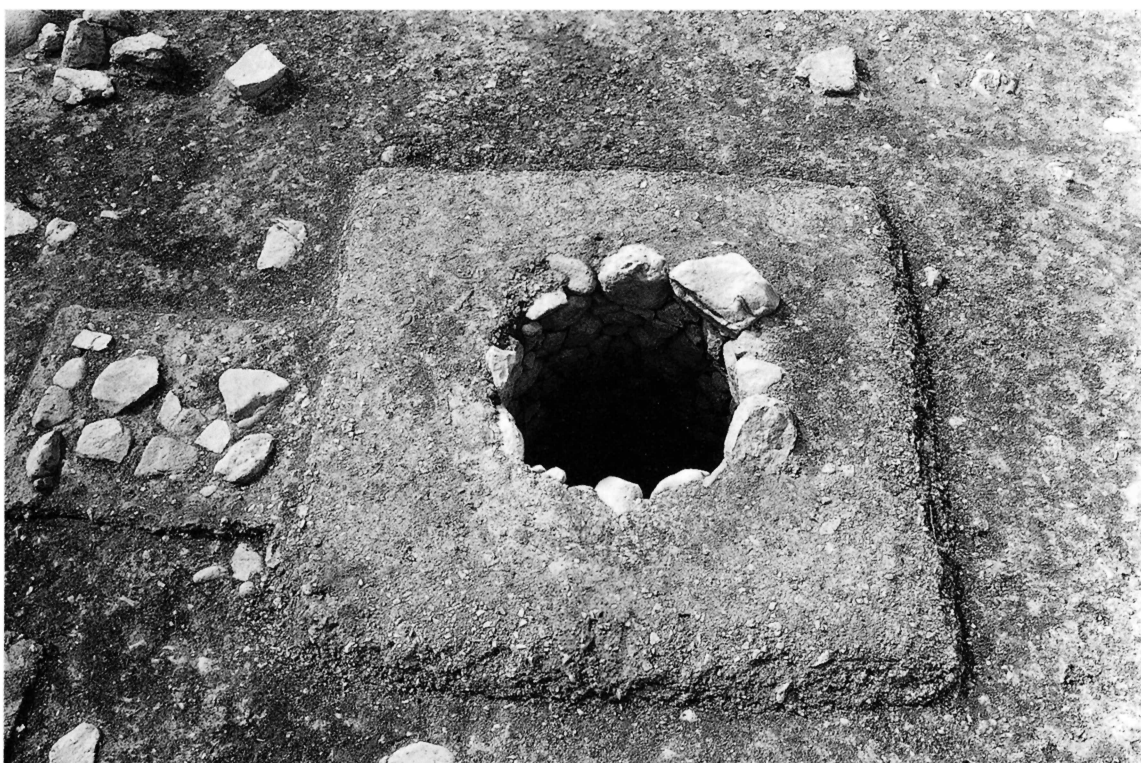
調査区全景（東から）



SS4951近景（南から）

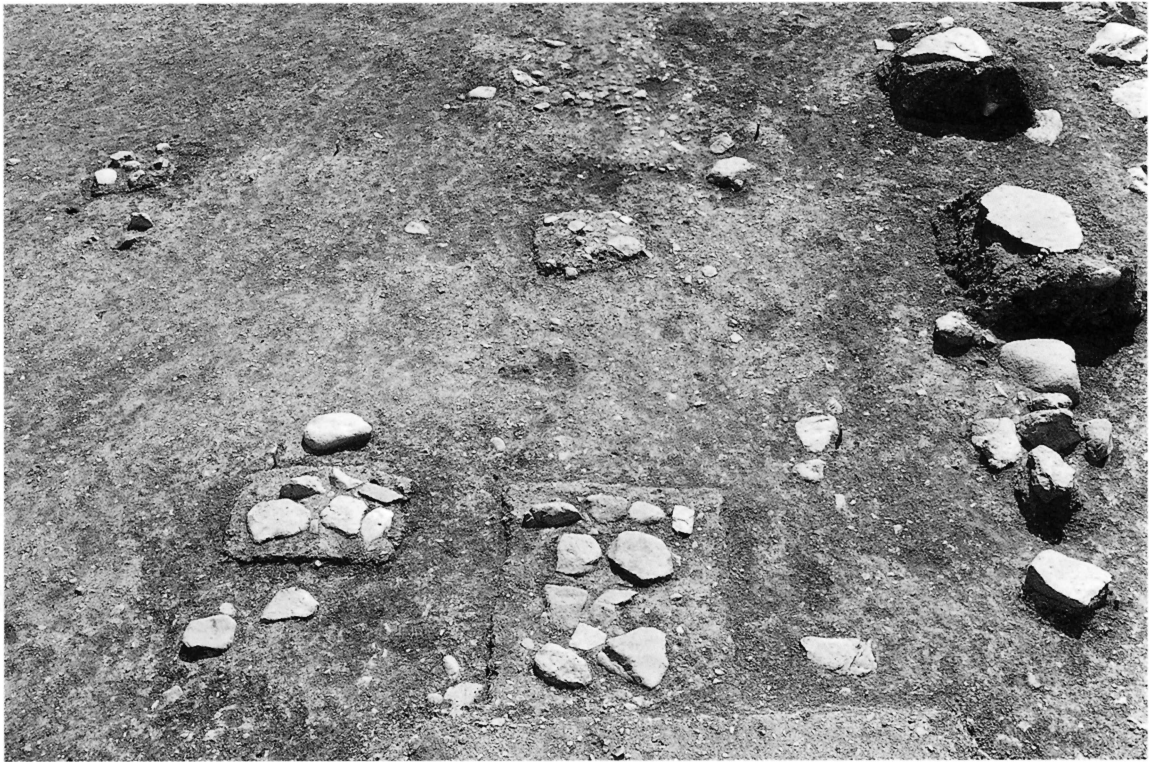


SE4955・SX4956・4957・4958・SA4960遠景（南から）



SE4955近景（東から）

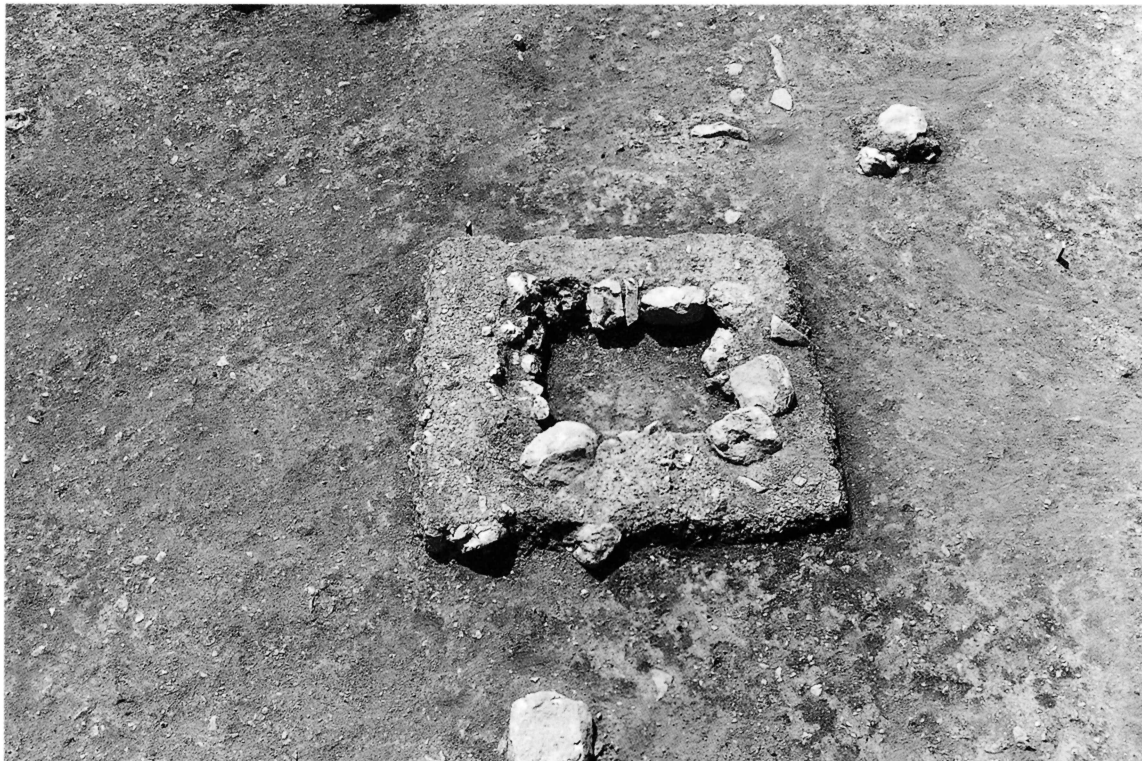




SX4956・4957・4958・4959近景（北から）



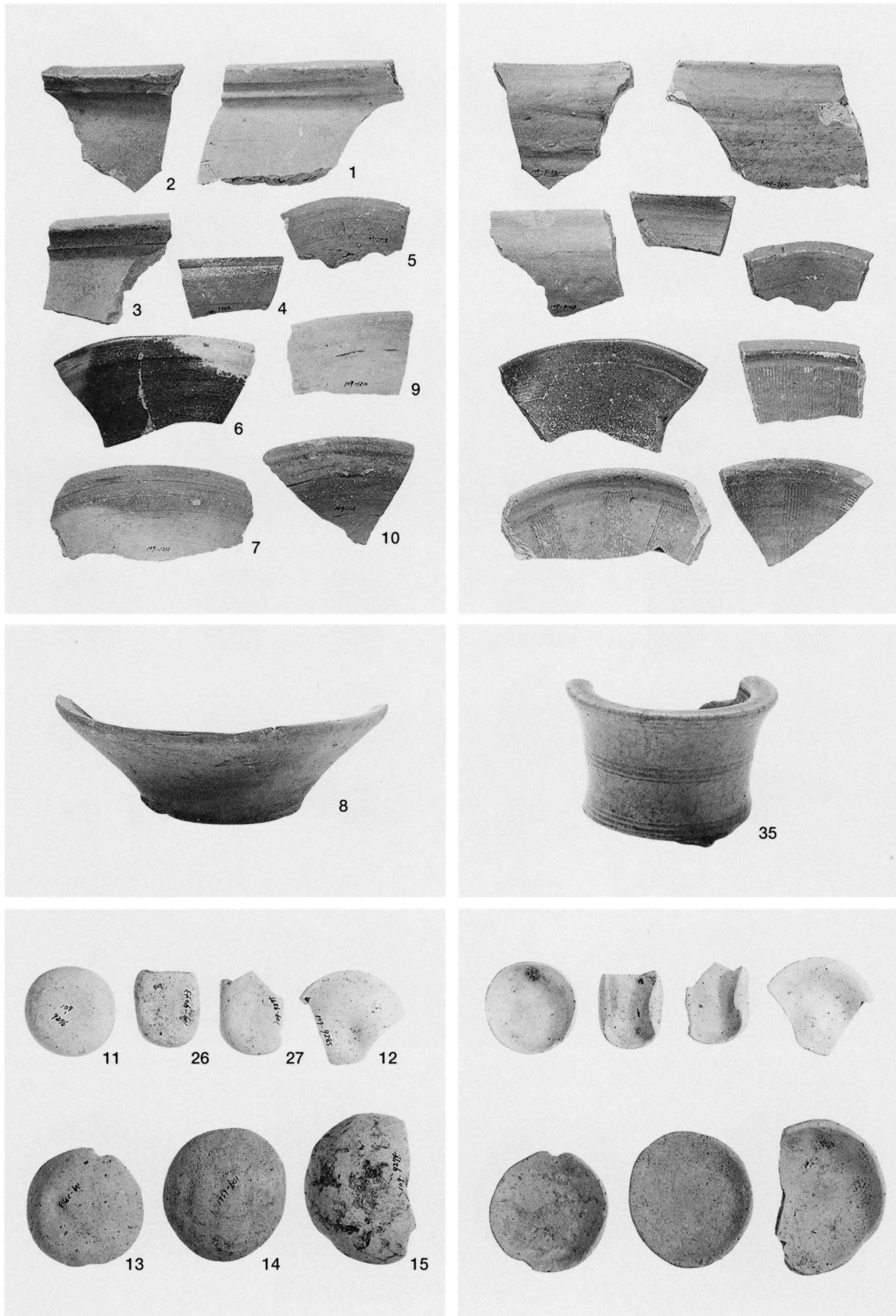
SA4960近景（南から）



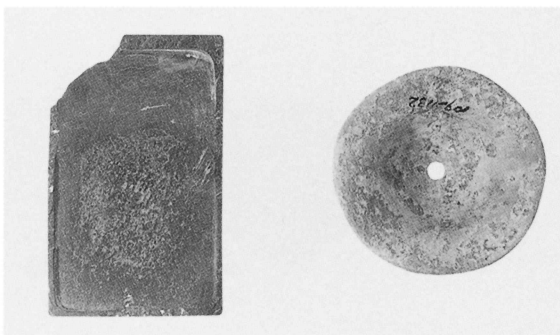
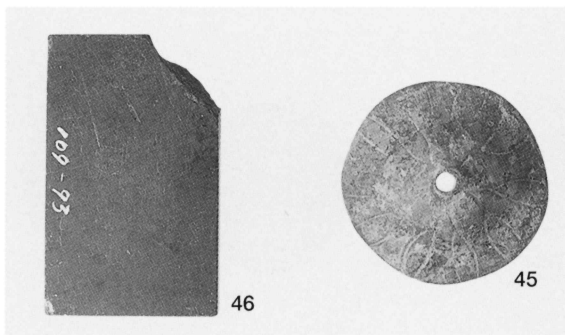
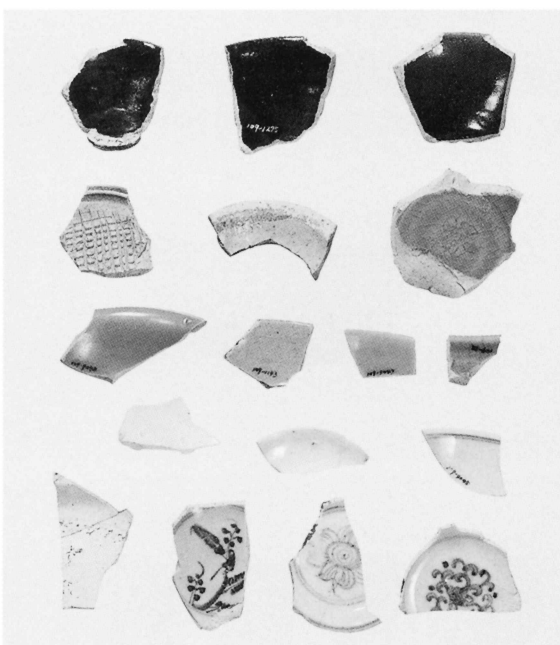
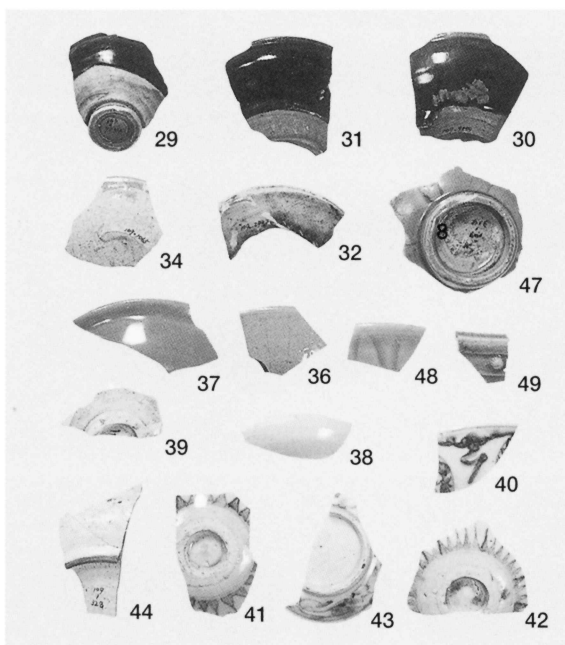
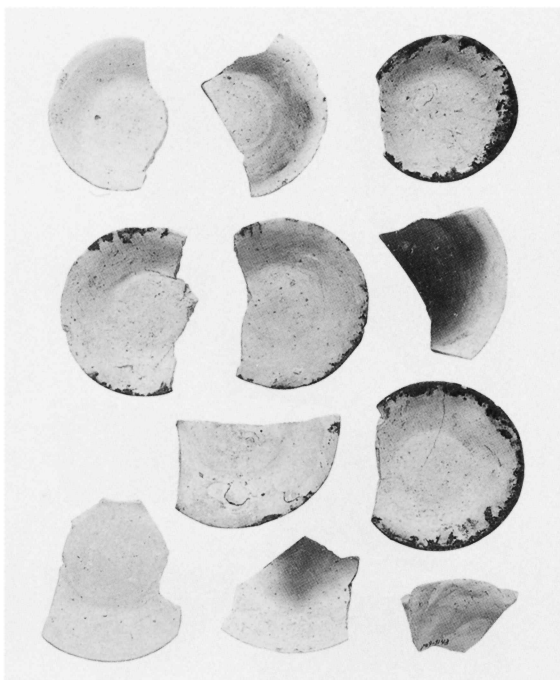
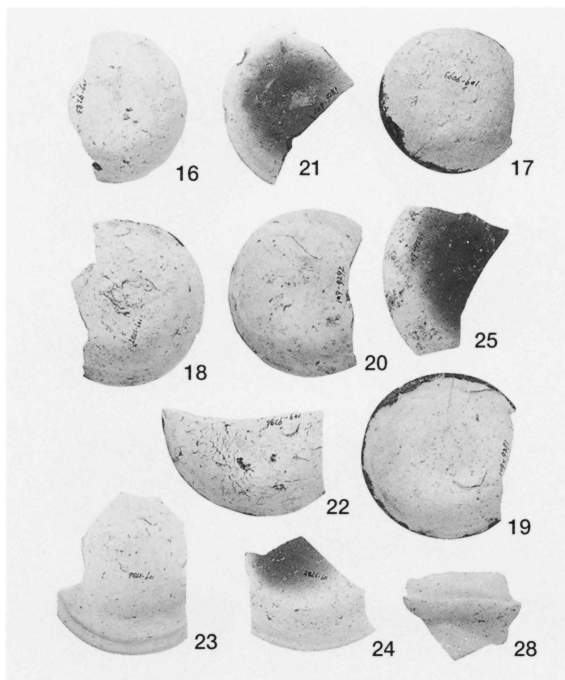
SF4962近景（北から）



SK4967近景（南から）



越前焼甕1~3 鉢4~6 播鉢7~10 土師質皿11~15 耳皿26・27 灰釉香炉35



土師質皿16~25 羽釜28 鉄釉碗29~31 灰釉皿32 卸皿34 青磁碗36・37・47・48 盤49 白磁皿38・39  
 染付碗40 皿41~44 金属製品仏具45 石製品硯46



権殿屋敷跡整備状況（南から）



権殿屋敷跡整備状況（北から）



権殿屋敷跡中央部整備状況（西南から）



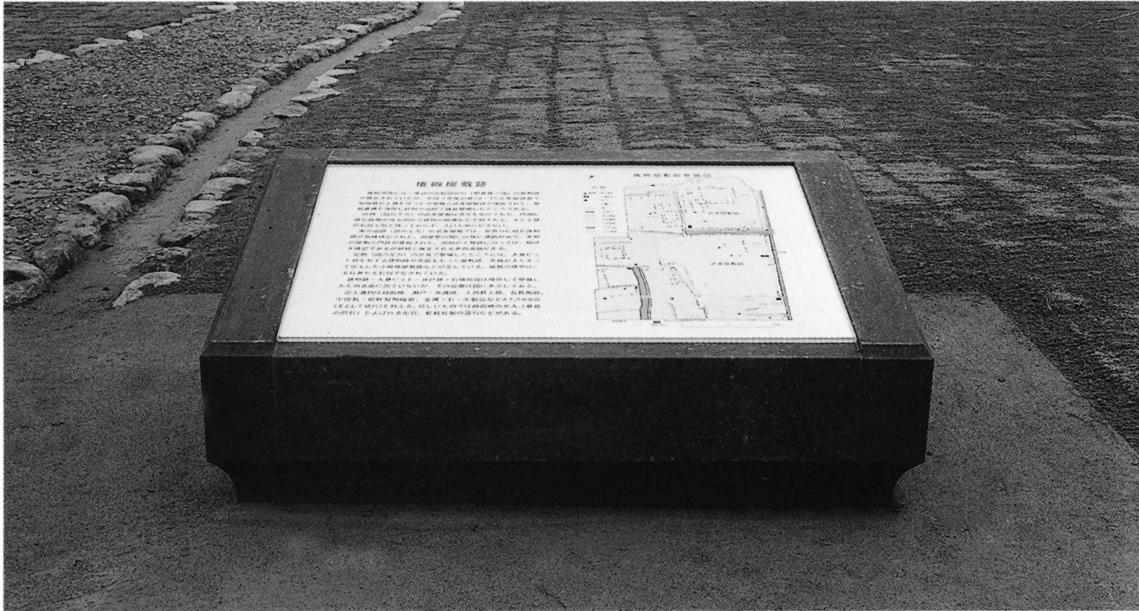
権殿武家屋敷跡整備状況（西から）



権殿屋敷跡中央部整備状況（東北から）



権殿屋敷跡整備状況（東から）



権殿屋敷跡整備説明板



館前排水路整備状況（東から）



同（西から）



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡
副書名	平成12年度発掘調査環境整備事業概要 (32)
シリーズ番	32
編集者名	佐藤 圭
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL0776-41-2301
発行年月日	平成13年3月31日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
第109次調査	福井市城戸ノ内町 字新御殿地係	18210	史-31	35°56′ 40″	136°17′ 42″	000815～ 1220	2,000m <sup>2</sup>	環境整備 に伴う発 掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第109次調査	武家屋敷	室町・戦国時代 (15・16世紀)	土塁石垣2,門1,道路 1,井戸1,廃棄土壇1	越前焼,土師質皿,瀬 戸美濃焼,青磁,白磁, 染付	大型の武家屋敷を 確認した。

特別史跡

## 一乗谷朝倉氏遺跡 32

平成12年度発掘調査環境整備事業概報

発行年月日 平成13年3月31日

編集・発行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館©

印刷 河和田屋印刷株式会社